

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「準動詞に関する通言語学的研究」（2013年度第3回研究会）

Title: Cross-linguistic Research on “Verbals” (The 3rd meeting)

日時：2013年2月9日（日曜日）10:30-17:30

Date/Time: 9 Feb 2014 (Sun.) 10:30-17:30

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

Venue: Room 304 (Multimedia Conference Room), ILCAA

Language: Japanese

1. 松本亮（京都大学）

「ネネツ語の準動詞の再考察」

ネネツ語の動詞形態の体系について再考察のための予備的な整理を行った。

定動詞以外の準動詞としては、これまで形動詞、動名詞、副動詞が分類のためのカテゴリーとして用いられてきた。言語類型論、特に形態構造において類似したアルタイ型言語と比べると、動名詞と形動詞が区別される点が特徴的といえる。動名詞が動詞的性質を保持しつつ名詞的接辞をとることが主であるのに対し、形動詞は接辞を伴わずに名詞を修飾することが主である。

一方で、副動詞として一つのカテゴリーでまとめることの難しさを主張した。アルタイ型言語に比べるとその種類の少ないことや、形態的に人称接辞をとるか否か、補助動詞と結合するか否か、意味が限られているかなどの基準で区別できることから、副動詞として統一的にまとめることに意義のある特徴を持っていないと見るほうが、妥当である。

2. 児倉徳和（AA 研共同研究員 / 日本学術振興会特別研究員・九州大学）

「シベ語準動詞の統語的機能と意味・音韻的特徴」

本発表では、シベ語の従来の研究で定動詞・動名詞・形動詞として扱われている形式の統語的機能の差異について各形式の述語用法における意味機能と音韻的特徴の差異から説明を試みた。本発表の結論は以下の四点にまとめられる。

- (1) 三つの形式のうち、定動詞と動名詞は発話参加者の記憶領域の状態変化を表すのに対し、形動詞は発話参加者の記憶領域の状態変化がないことを表す。
- (2) 記憶領域の状態変化の有無、という意味機能の差異は三つの形式の音韻的特徴、つまりこれらの形式が現れる節のとりイントネーションの差異を説明可能な点で妥当性をもつ。

- (3) 三つの形式の統語的機能の差異は、記憶領域の状態変化が可能な統語的単位の制約を仮定することにより説明が可能になる。つまり、定動詞と動名詞は発話参加者の記憶領域の状態変化を表すため、状態変化が可能な単位の制約を受けるのに対し、発話参加者の記憶領域の状態変化を表さない形動詞は、記憶領域の状態変化が可能な単位という制約を受けないため、連体節を含めた幅広い統語的環境に現れることが可能である。
- (4) 三つの形式の意味機能と音韻的特徴の差異から、シベ語における節の定性（finiteness）は節の意味的、音韻的特徴も加味して決定されるものであり、また、プロトタイプ的な見方をとることが有効である。

上記のほか、来年度のプロジェクト運営にかんして意見交換をおこなった。